日本英語教育史学会 会報
323
2024 年 10 月 18 日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan
日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人　日本英語教育史学会（代表：田邉祐司）
事務局　〒727-0023　広島県庄原市七塚町 5562
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
tel：0824-74-1727　fax：0824-74-0191
e-mail：membership@hiset.jp

会費納入口座（名義人：日本英語教育史学会）
ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第299回研究例会報告

2024（令和 6）年 9 月 21 日（土），第 299 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は 24 名でした。

例会では 2 つの研究発表が行われました。最初の研究発表では，久保野雅史氏（神奈川大学）が「学校英語教育は，なぜ危機に瀕しているのか？」というタイトルでお話しされました。続いて上野舞斗氏（四天王寺大学）による「母音直上方式の強勢表記の源流をたどる」の研究発表が行われました。司会は孫工季也氏（金沢学院大学）でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください（①は久保野氏，②は上野氏の発表への感想です）。

＜発表①の感想＞

◆教科書で扱われている単語の選定はコーパスに基づく使用頻度に基づいて決められているのか，それともコーパスによる使用頻度に基づかず，教科書会社の思惑や，はやりすたりのあるテーマに基づくものなのかを知りたいと思った。（岩橋一樹）

◆学校英語教育の危機的状況とその背景についての説得力に富む，また熱のこもったご発表で，強く共感しながら拝聴しました。国家が上から「授業は英語で」を指定したり，語彙を一気に倍増させたり，英検合格率などの数値で一律に到達目標を設定するような政策は，明治以降の英語教育政策史にはなかった暴挙だと思います（要裏付け）。トップダウン方式を可能にした官邸による教育振興基本計画が諸悪の根源だという指摘はその通りで，この廃止には教育基本法の再改正が必要ですが，あきらめずに追求しましょう。

現在の政策に至る直接的な過程としては，1980 年代の中曽根内閣直属の臨時教育審議会に始まり，2002 年の文部科学省による「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」と翌年の「行動計画」での英検の指標化，2003 年の自民党教育再生実行本部による小学校英語の教科化・中学校英語の英語での授業・英検取得率の数値目標設定などの流れがあると思います。今回の上野さんの発表ではないですが，「理不尽な英語教育政策の源流をたどる」と，さらに深みが出るのではないでしょうか。（みかん舟）

◆久保野先生が唱えられている「危機」を，私も毎日学校で感じております。英検３級合格者の不可解な報告のようなことが，高校現場でも起きています。 文部科学省および経済産業省の施策としての「英語教育」や「探究学習」。そのプロパガンダ推進の一翼を担わされていること，

納得ができない毎日です。 久保野先生が，豊富なご経験から現状に異を唱えられていること，現場の教員にとって大きな支えになりました。（小金丸倫隆）
◆久保野先生の英語教育に対する情熱と，定見のない（思いつき，思い込み，利益誘導などなどの）改革策（とその施行）への怒りを共有した思いです。（松井孝志）
◆非常に明快かつ痛快なご発表に大変感銘を受けました。例会内でも取り上げられた「ヒリヒリ」という感覚は，今後も失うことなく学校教育に取り組んでいかなければならないと感じました。過程を踏むごとに英検取得者率が改変されていく様子は，驚くと共に情けないような，そのような複雑な心境にも至りました。（ポレポレ）

＜発表②の感想＞

◆母音直上方式に基づかない強勢表記と接頭辞や接尾辞との関わりについても知りたいと思った。母音直上方式に基づかない場合は接頭辞や接尾辞がどれなのかも示しやすくなると思われるが，なぜそういったことを踏まえずに母音直上方式が残っているのか知りたい。（岩橋一樹）
◆たいへん緻密なご発表で，母音直上方式強勢表記の源流が，日本では文部省（実際の著者は B. H. Chamberlain）の *Directions for the Pronunciation of English*（1887）にまで遡ること，それには Müller（1862）が影響を与えていたのであろうこと，つまり「日本独自の方法というわけではない」事実を発見された意義はたいへん大きいと思います。名探偵の謎解きのような展開で，ワクワクしながら拝聴しました。1923 年に始まる官立高校入試での発音記号問題の影響や，音声学的に問題の多い母音直上方式がなぜ今日まで変わらず使い続けられているのか，についても知りたいと思いました。（みかん舟）
◆発音記号には日ごろから大変興味を持っているので，非常に興味深く拝聴させていただきました。ありがとうございました。（小金丸倫隆）
◆非常に興味深い内容を理路整然と解き明かすように発表されていて刺激を受けました。上野先生が最後に仰っていた「学習者」の視点での強勢表記の効能を自分でも考えて見ようと思いました。（松井孝志）
◆史的変遷を辿る場合の多くは旧→新の流れが一般的かと思いますが，今回は「源流」を辿るとのことで逆のベクトルでご発表を伺うことができて，とても新鮮でした。史料一つ一つを細かくも理路整然に紐解いていく内容には，とてもワクワクさせられるような内容でした。是非とも今後も調査を続け，ご発表いただければと思います。（ポレポレ）

＜会全体に対する感想＞

◆会員でない方にも情報発信がこまめに行われているのでこの学会に興味を持つきっかけが豊富に用意されていると思います。（岩橋一樹）
◆直前に参加申し込みをさせていただいたにもかかわらず，ご対応いただきましたこと，感謝いたします。神奈川県立大磯高等学校で英語教員を行っております，小金丸倫隆と申します。これまで，様々な場面で，久保野先生にご指導いただいております。 私自身も 10 数年にわたり，高等学校英語科検定教科書を執筆しておりますので，本日のご発表内容は２つとも，大変興味深く，課題意識をもって拝聴させていただきました。 ありがとうございました。（小金丸倫隆）
◆会員外ですが，オンラインでの実施をしていただき感謝しかないです。（松井孝志）

発表を終えて

久保野雅史（神奈川大学）

1980 年代の初頭，学生時代の英語科教育法の授業で浅野博先生は「平泉試案」を紹介して下さり，「君たちが高校の教壇に立っている間に，英語教育は徐々にこの方向に推移していく可能性がある。気をつけて見ていくように。」と仰いました。この警告が今まさに現実のものとなりつつあります。中学生の学力・意欲が二極化しているとのデータもあり，学校英語教育は破綻の危機に瀕しています。

令和 5（2023）年度 全国学力・学習状況調査の結果は「全国の中学 3 年生で英検 3 級相当以上の割合が初めて 50%を超えた」とされていますが，英検 3 級以上の資格を実際に取得したのは 28%に過ぎず，残りの 22%は日常の成績などから「同等の英語力あり」と教員や学校が判断したに過ぎません。「教員が 6 割と判断し，学校長が 7 割に上方修正し，自治体が 8 割に書き換えた」というような告発の声も聞こえてきます。このような「データ偽装」による信頼性を欠く調査結果が「現行指導要領の目標設定は妥当で成果もあげている」とする根拠資料として使っていくのでしょうか。

現実を直視せず無謀な突進を続ければ破綻に至ることは，歴史が証明しています。予算や人員確保等の条件整備が不十分なまま，教員の努力のみで高度な目標は達成できるのでしょうか。失敗から学ばない組織に，明るい未来が訪れるとは思えません。

発表を終えて

上野舞斗（四天王寺大学）

この度は発表の機会を与えてくださり，誠にありがとうございました。「母音直上方式の強勢表記の源流をたどる」と題した本発表は，applied /əpláɪd/ のように強音節に含まれる母音の直上に鋭角アクセント記号（ ´ ）を置く方法（母音直上方式）が，なぜ，どのような経緯で使用されるようになったのか，その源流をたどろうとしたものです。研究の中で明らかになったのは，母音直上方式の採用理由は積極的なものではなかったこと，そして少なくとも国内では *Directions for the Pronunciation of English*（1887）にまでさかぼのることができるということでした。しばしば，母音直上方式は日本独自の方法であるように語られますが，さらに海外の文献に目を向けてさかのぼれば，*Directions for the Pronunciation of English*（1887）以前の英米の文献にすでに母音直上方式が用いられていることも判明しました。本研究を通じて，改めて「当たり前」に流されず歴史に向き合うことの重要性を学んだ次第です。

なお，発表終盤にも申し上げましたが，川に複数の水源が複数存在するように，今回特定した「源流」も複数あるうちの一つにしか過ぎない可能性があります。他の水源を探し出し，どれが本流で，どれが支流かということを同定する作業がこれから始まります。そのために必要な情報の多くを，発表後の質疑応答や懇親会で多くの皆さまから頂戴しました。この場をお借りして深くお礼申し上げます。

〉〉英語教育史フォルダ

◆田邉祐司（著）『日本人は英語の発音をどう学び、教えてきたか：英語音声教育の小通史』研究社.　2024 年 10 月 23 日発刊。

〉〉この先の研究例会・全国大会

◆ 第 300 回研究例会　2024 年 11 月 16 日（土）　オンライン

◆ 第 301 回研究例会　2025 年 1 月 11*日（土）　オンライン

*【会報編集部より】第 301 回研究例会の日程について，会報 322 で 1 月 18 日（土）と誤った記載をしておりました。ここに訂正し，お詫びを申し上げます。

◆ 第 302 回研究例会　2025 年 3 月 15 日（土）　専修大学サテライトキャンパス（対面開催）

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は，(1) 発表希望月，(2) タイトル，(3) 発表概要（100～200 字程度），(4) 使用予定機器，の 4 点を明記の上，発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日（3 月発表希望であれば 12 月 10 日）までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

日本英語教育史学会 第 300 回 研究例会

日　　時：　2024 年 11 月 16 日（土）14:00～17:00　オンライン開催

シリーズ：わたしのしごと　「“口のことば”としての英語研究と教育の 40 年」

田邉祐司（専修大学）

【発表者から】研究テーマは「口のことば」としての英語の指導・学習です。音声は言語教育でも中核領域ですが，日本の学校教育ではその重要性は認識されながらも，「筆のことば」に多くのエネルギーが費やされ，音声面はずっと副次的な位置付けとして推移し，音声は日本人の英語力にとってのボトルネックになったままです。今回はこの問題に関してどう対処してきたのかを語ってみます。

シリーズ：私の愛した教材　　「恩師の編んだ教材」

河村和也（県立広島大学）

【発表者から】高 2 の春に配られた英語の教材には，英語の研究室（準備室）を訪ねるといつも声をかけてくださる先生の名前が編著者として記されていました。思えば，大学を卒業するまで多くの「恩師の編んだ教材」で学びました。教員になってからも，恩師の関わったさまざまな書籍を参考に授業の準備をしたものです。その中からいくつかを紹介し，思い出話から「教材論」のようなものに一歩でも踏み出すことができればと思っています。

参 加 費：　無料

問 合 せ：　日本英語教育史学会例会担当（reikai@hiset.jp）

EDITOR'S BOX　3 月から研究例会においても対面開催が復活することになりました。（若）

© 日本英語教育史学会会報編集部（秋田大学 若有研究室 wakaari@nifty.com）